

私は、20代の頃、発刊間もない「二十一世紀への対話」(上下)を読んだ。あれから40年、今回の小論文の応募にあたり再読した。40年を振り返り、今も鮮明に生命に刻まれているのは、池田先生とトインビーの対談を終えての語りである。

その光景は、新「人間革命」第16巻に詳しく綴られている。「最後の質問になりますが、21世紀に生きる人類のために、なんらかのアドバイスがあれば、お伺いしたいと思います」と伸一こと、池田先生がたずねた時、トインビー博士は「人間の富への貪欲性が生んだ技術が、随所にわれわれの環境を毒し、かけがえのない天然資源も失われつつあることを指摘し、憂いに満ちた顔で「このまま同じ道を進むならば、待っているのは人類の集団的自殺です。私が伝えたいことは、21世紀に至るまでの人類がその責任を自覚するとともに、直ちに行動を開始しなければならないことです」と。更に「最後の最後に・・・私個人に山本伸一個人に、何か忠告があればお願いします」との問いかけに「私は学問の世界の人間です・・・あなたは極めて重要な組織の責任ある指導者であり、仏法の実践者として行動されている。“行動の人”に対して、“机上の学者が”がアドバイスするなど、おこがましいことです」と語り、“ミスター・ヤマモト”と私とは、人間がいかに生きるべきか、見解が一致した。あとは、あなたが主張された中道こそ、今後、あなたが歩むべき道なのです」と21世紀への後事を、池田先生に託された。私は今、池田先生とトインビー博士のこの言葉の重みを年を経るに従い感じる。

また、序文では、トインビー博士自身が「両著者は、人類の存続に不可欠の条件として、人類がその姿勢、目標、行為に根深い変革を行うことの必要性をともに信じている。ただ、全体としてみれば、アーノルド・トインビーは、人類がそうした根深い変革を成すには高価な代償を支払わねばならないと予測する点で、池田大作よりも悲観的である」と述べている。

現下の、社会情勢、世界情勢を俯瞰した時、世界は混とんとし、日本を囲む国際情勢も厳しいものがある。世紀の大戦から70年を経た日本においても、戦争の風化が懸念される時代となってきた。この地球上から「戦争」の二字がなくなることが空虚に思える時代でもある。そんな前途不明、不確実な時代だけに、「二十一世紀への対話」の意味するものも大きいのではなかろうか。

私は、今回の小論文で、第1部「人生と社会」の第3章「知的生物としての人間」の①「学問・教育のあり方」に論点を絞り試論を述べたい。私は、現在、創価大学教育学部教育学科3年(通信教育部)に在籍する。還暦を迎えたら、第三の人生は、100%の仕事人間ではなく、仕事をしつつも、自分のやりたい時間を持ち生きていきたいと考えていた。そして、

創価大学の法学部に学士入学、卒業してから更に、経済学部へ入学。そして、今春、教育学部に入学した。「いまさら・・・」といった外野席の声を尻目に、初志貫徹。老いは迫りくるも、我が生涯の中で、今最高に学ぶことの喜びを実感しつつ、この小論文のペンを走らせている。

今回、テーマに掲げた第3章「知的生物としての人間」の「学問・教育のあり方」で、池田先生は、①「教育のめざすもの」の冒頭、トインビー博士の「学問・教育の本質は、実利的な動機に基づくものではなく、宇宙の背後に存在する“精神の存在”との霊的な交わりを求めることにある」との説に触れ、「私も、学問や教育というものの本義は、そうした、ある意味での宗教的なものにまで迫ることにあると思います。そして何より、人間としていかにあるべきか、人生をどのように生きるべきかという、人間にとって不可欠の問題を解決し、解答を与えるところに、その根本的課題があると思う」と述べられている。さらに、池田先生は、現代の技術文明にあっては、教育のあるべき姿から逸脱し、「教育が実理性の侍女になり下がっており、欲求追求の具になってしまっている」と警鐘を鳴らし、トインビー博士も「私は、教育のめざすべきものはあくまでも宗教的なもの・・・教育は、人生の意味や目的を理解させ、正しい生き方を見いださせるための探究でなければならぬ」と教育の本質に迫る発言をしている。

現代文明にあって、人間社会の組織や技術は急速に発展し、人間は技術革新に飲み込まれ、それを克服するためにあがきながら応戦している。こうした風潮は、人間が本来の目的を見失い、現実の政治や経済活動の奴隷になり下がり、教育の荒廃が叫ばれる今日、教育を本来の、人間としての基本的なあり方や人間存在の根本を明らかにする学問、また教育へと転換していくことが最重要課題となってきた。そういった意味から、学校教育を再考、それをカバーする社会教育、生涯教育の社会的役割が一段と増してきているのではなかろうか。池田先生もその点を重視され②「生涯教育について」の項で、「一人の教師が何十人もの青少年をみななければならない現在の学校教育のやり方では、目的は達しえない」と、学校教育の不完全性を指摘。更にトインビー博士も「知識が常に増大し、しかもその解釈がたえず変化している今日の世界ではフルタイム（全日制）の青少年教育だけでは十分ではありません」と、生涯教育の必要性を訴えている。

個人の才能は多種多様、その発達段階も千差万別である。その人間の価値は、学問・知識の量や能力で決まるものではない。池田先生は、青少年向けの著書「青春対話」の中でも「『だれでも、何かの天才である。』という言葉がある。・・・自分らしく咲けばよい。自分の宝石、自分の天分が必ずある」と、すべての人間が自身だけにしかない素晴らしい才能を持っている、使命を持っている、と未来を担う青少年に温かいまなざしを送り続けている。すべての人間には、その人にしかない使命を持っている、という仏法の人間観こそ

教育のあるべき姿を実に分かりやすい表現で紹介しており、また、池田先生は「学生時代の優等生が必ずしも人生の成功者とはかぎらない」「中年期あるいは晩年になってから、優れた才能をあらわす場合も多々」と、人間の発達段階の差異を指摘。トインビー博士も「子どもの頃は明らかにおくてであり、青年期には明らかに才気煥発であり、中年期には明らかに失敗者であり、60代にはまぎれもなく偉大な人物」と、チャーチルの人生を紹介している。高齢社会を迎えた現代にあって、第三の人生を歩む私にとっては希望のことばであり、学問・教育は、学校教育だけでなく生涯教育の視点からもとらえるべきである。

また、「親の背を見て子は育つ」というが、親の仕事場が身近にあり、世代から世代に受け継いできた生活体験の中から学んできた良き教育の伝統は、技術革新、オートメーション化の今日においては、完全に崩れてしまったといっても過言ではない。特にIT革命は、日進月歩で、若い世代から教を請わなければならない時代でもある。これは、最先端の開発部門の問題だけでなく、生産部門や情報伝達部門など、産業界のあらゆる部門で起こってきている。すなわち、生涯にわたっての教育・学習は時代の要請でもあるのである

国連の教育・科学・文化機関であるユネスコ憲章では「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心に平和の砦を築かなければならない」とある。その憲章の精神を受け、1960年、モントリオールで開かれた第2回世界成人教育会議では、「現在のように分裂した世界において国際的な理解を促進するには、成人教育の果たす役割は特に重要である。もしも人類が平和のうちに共存することを学びえたならば、人類は、未だかつて手にしたことのないような個人のしあわせと社会の発展の機会をもつことになるだろう」との宣言が採択された。そして、1965年の成人教育推進国際委員会におけるポール・ラングランの「教育は児童期・青年期で停止するものではない。それは、人間が生きているかぎりつづけられるべきもの」とのワーキング・ペーパーをきっかけに「生涯教育」理念がユネスコによって提唱され、「連続教育」—いわゆる生涯教育が国際目標となった。

ユネスコの国際連合教育科学文化機関による「万人のための教育目標」の進捗状況を示す「EFAグローバルモニタリングレポート 2015」（日本語版）発行：JICA、ACCU、JNNE 2015年7月では、2015年までに成人（特に女性の）識字率の50%改善を達成する。すべての成人が、基礎教育及び継続教育に対する公平なアクセスを達成する、となっていた。現状は、成人非識字者の数はおよそ7億8100万人である。非識字率は2000年の18%からわずかに下がって、2015年には14%になると見込まれており、非識字率を50%低下させるというダカール行動枠組みの目標は達成されなかった。2000年に識字率95%以下だった73カ国のうち、2015年までに非識字率を半減させたのはわずか17カ国である。識字率のジェンダー格差解消に向けた進捗はみられるが、十分ではない。識字者数が2000年に男性100人に対し女性90人未満だった43カ国すべてが平等に近づいたが、いずれも2015年までに目標は達成でき

ないだろう、と報告されている。

これらの識字率の推移から、ユネスコが推進する世界の教育環境は、国別の差はあるものの整いつつある。特に教育の男女の差が縮まってきていることは喜ばしいことである。「二十一世紀への対話」でも池田先生とトインビー博士は、④「男女共学の得失」の中で「男女別、男女共学の両制度には、ともに多くの議論の余地がある」（トインビー博士）と、問題提起し、池田先生もこの問題にはそれぞれ長短があり、あくまで学ぶ側の自己判断にゆだねるべきだ、そのために学校、公共機関が正しい判断のための素材を提供すること、と述べられている。いずれにしてもトインビー博士が夫人のケンブリッジ大学への入学が認められながらも女性ゆえに、学位を取ることができなかったように、学問の世界では女性蔑視が大多数の国の共通事項であった。最後に、池田先生の「平和提言」から自分なりの今後の展望を述べたい。池田先生は、1983年以來、毎年、1月26日（SGIの結成記念日）に世界に平和提言を発信してきた。1990年の提言で池田先生は「教育特別総会」の開催を提案され「本年は国連が定めた『国連識字年』であります。現在15歳以上の世界人口の約3割、およそ9億人が非識字者、すなわち読み書きができない人といわれています。そのほとんどがいわゆる第三世界に属する人々」と警鐘をならされ、「地球上のすべての人々に適切な食糧、水、健康、教育を確保するという人間的目標の実現のために追加すべき費用は、1990年代を通じて世界が毎年軍事費に使っている額の5%にあたる」と指摘。その軍事費の削減部分の一部を、国連が第三世界への「教育発展基金」として、有効に活用することを提案している。この教育の資金源についても、池田先生とトインビー博士は③「教育の資金源について」の項で話し合われており、「現代においては、教育は国家権力の支配下におかれ、国家が追求する目的に、教育行政が追従している」と警鐘を鳴らされている。

更に2014年の提言では、2014年で終了した「国連持続可能な開発のための教育（ESD）」の10年の後継枠組みとして、「世界市民教育プログラム」を新たに儲け、国連と市民社会との協働プロジェクトとして進めることを提案されている。先に述べた国連レベルでの教育援助は、「世界市民教育」の潮流の一石になっていくのではなかろうか。また、1985年の第4回ユネスコ国際成人教育会議で採択された「学習権宣言」では「学習権は、きたるべき日のためにとっておかれる文化的ぜいたく品ではない。それは、生存の問題が解決された後にはじめて生じる権利ではない」とし、人間が人間らしく生きていく上で、学習権は衣食住の次ではなく、それらと同時に保障されなければならない欠かせない権利である、と宣言している。新生・南アフリカのマンデラ大統領との語らいで、池田先生は「対話を通して、“教育こそ、人間の尊厳を照らす光源である”との信念を私たちは強め合いましたが、そうした教育は一国の単位に限らず、人類全体の未来の命運を握るものと言っても過言ではありません」（第39回「SGIの日」記念提言、2014年）と述べられている。地球上のあらゆる民族が、人間の人間としての基本的人権としての教育—すなわち「学ぶ」という、「学

習権」が世界の 70 億の民にいきとどくならば、人類は、民族、宗教等のあらゆる差異の壁を乗り越え、地球民族としての一体感が生まれ、戦争のない生命の世紀が訪れるのではなかろうか。発刊から 40 年の歳月を経てもなお光彩を放つ二人の人類の巨匠の「二十一世紀への対話」は、永遠の指標となっていく。

参考文献：「二十一世紀への対話」（アーノルド・J・トインビー、池田大作、文芸春秋）

「新しき人類社会と国連の使命」（上下、池田大作平和提言選集、戸田記念国際平和研究所編、潮出版社）、「青春対話」（池田大作、聖教新聞社）、「新・人間革命」第 16 卷（池田大作、聖教新聞社）、「EFA グローバルモニタリングレポート 2015」（日本語版、UNESCO 2015 著、浜野隆翻訳監修）